

陳列館の活動と激動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学考古学博物館 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10068

陳列館の活動と激動

小林 三郎

〔I〕

昭和31(1956)年4月に、明治大学に入学した私のはじめて考古学陳列館を訪れたのは、その年の4月13日、入学式のあとでおこなわれたガイダンスの時だった。当時、助手をなさっていた大塚初重先生の案内で、本館(2号館)4階の、いま記憶している印象では、やたらにほこりっぽい場所だった。廊下の両側に立ちならぶ本棚と土器片の小箱、ずい分ガタの来ている陳列ケース、だがそこに展示してある中味は、事の次第を知らば知るほど身ぶるいのするほどの内容のものだった。整理室や資料室を案内していただき、そこに居られた先輩達にも、はじめにお目もじした。当時、囑託をされていた芹沢長介先生も紹介していただいた。岡本勇先生はご病気とかでお休みであったことを憶えている。

当時、考古学陳列館がどのような機構で、どのような運営だったのかは、いまはほとんど知る人はいないだろう。後藤守一先生が館長だったのか、若き日の杉原荘介先生が館長だったのかは、いまもってわからない。ただ「館長」という職名がなかったことだけはたしかなので、どちらかの先生が責任を持っておられたのであろう。昭和32年の杉原先生の渡欧・訪中のお土産としてもたらされたヨーロッパの旧石器時代・新石器時代の遺物や、中国科学院から寄贈を受けた周口店や丁村の石器模型など、陳列館の展示物が一段とにぎやかになったことが、ようやく、後の考古学陳列館の展示構想と連絡することがわかる。

周口店・丁村の
石器模型

明治大学創立80周年記念事業の一環としてのアラスカ学術調査や、日本考古学協会西北九州総合調査に伴う発掘調査など、いくつかの調査が計画、実施されている中で、後藤守一先生を失なうことになった。昭和35年7月のことだった。

後藤先生の逝去

昭和35年当時の考古学陳列館には、自称館長の杉原先生、囑託として岡田淳子氏(現北海道大学教授)と白石竹雄氏(現千葉県教育庁)とが勤務しておられて同年4月から白石氏が明大の人文科学研究所へ移られたところだった。昭和35年・36年の2ケ年にわたって大学院生として在籍した私は、昭和35年には岡田氏とご一緒の仕事をさせていただき、白石氏とは夕方になると一緒に時を過ごすことが多かった。昭和35年は大学の創立80周年記念やら、安保闘争などで大学の内外が大きく揺れていた年でもある。アラスカ調査で杉原・戸沢両先生を欠いた考古学研究室と陳列館は大塚先生に責任の全部がかかってしまっていた。30才代中ばの大塚先生が一番苦勞させられた時でもある。

明大80周年

アラスカ学術調
査

〔II〕

専任職員の就任

昭和37年4月に、いままで専任職員のいなかった考古学陳列館に専任職員として私が勤務することになった。それまでは、大学院生がかなり主体的に毎日の管理をしていて、同時に学部学生の指導もしていた。専任職員が出来て大学院生の仕事の一つ減って、毎日の鍵管理が楽になった。しかし、学生の指導や資料の整理などは、相変わらず多忙をきわめていた。研究室での調査資料は、全部考古学陳

列館で整理して報告書の作成までをおこなう。その場所としての考古学陳列館の役割はきわめて大きいものであった。考古学陳列館学芸員の役目の大半は、そうした仕事のマネージメントであった。少ない予算、いくら頼んでも改善されない施設の中で、少しでもよい仕事環境作りと、展示施設の充実がその次の大きな役目であった。

昭和30年代は、考古学研究室の計画していた調査が最も多く、その規模も次第に大きくなった時代でもある。日本列島の先土器時代の全体像を求めようとした北海道から九州地方に至るまでの各地における調査、広島大学から依頼のあった帝釈峡遺跡群の調査など、いくつもの画期をつくった調査がある。杉原先生の関係の深かった市川市史編さん事業も、明大の縄文時代研究の進展に大きく関係がある。戸沢充則先生をキャップとする姥山貝塚の測量、発掘調査、曾谷貝塚の調査などは研究室と学生とが一体となった、当時にしてみれば大調査でもあった。

姥山貝塚・曾谷貝塚の調査

「日本農耕文化の生成」編集の主たる舞台は考古学陳列館で、基本的準備の段階では松沢亜生氏、大山恵子氏が参画しておられたし、原稿の浄書、図版の浄書・編集などの最終段階を白石竹雄氏と私とで分担してきた。

日本農耕文化の生成

五領遺跡

埼玉五領遺跡をはじめとする古式土師器を出す集落と土器の研究も、昭和30年代に花開いた部分でもある。五領遺跡の継続調査、福井県林遺跡の調査など、全国的な弥生・土師式土器の集成事業の舞台も、明大考古学陳列館であった。

三池平古墳

後藤守一先生晩年の代表的調査である静岡県三池平古墳の調査とその整理作業・報告書作成も考古学陳列館でおこなわれた。後藤先生没後の仕事となってしまったので、結局苦労したのは大塚先生だったようである。同じような茨城県三味塚古墳の例もある。明大の大学院講義を担当しておられた齋藤忠先生にも三味塚古墳の時には大変ご苦労をおかけしてしまったと記憶する。後藤先生の調査は、多く県や市町村からの依頼による仕事だった関係で、資料が明大にのこっていない。ほとんどを地元に戻却してある。明大に古墳関係の資料が少ないのはこの為である。

三味塚古墳

〔Ⅲ〕

昭和37年度中の大きな仕事として9月中旬に「日本考古学年報」〔4〕昭和28年度版を出版すること、11月には「市川市の貝塚」出版計画があり、その中の10月に「考古学陳列館案内」を出版する計画が考えられていた。こうした動きの中で昭和38年に、中国科学院考古研究所の夏鼐先生の来日が決定して、同時に明大来訪の件も報ぜられた。渡りに舟の情報で、廊下に山積の未整理資料移転の好機となった。早速、3号館廊下に棚の移転が決まり、廊下に小陳列室を増設することにした。仕事は結局予定通りに出来ず、小陳列室と陳列館案内は昭和38年に一部ずれ込むことになってしまった。小陳列室には外国から寄贈を受けた石器類を中心とした遺物と、先土器時代の北海道関係のものを展示した。今でも健在な「ナウマン象」の化石レプリカもその時代に製作したものである。

考古学陳列館案内出版

夏鼐先生来日

夏鼐先生には昭和38年12月の来日と決まったので、考古学陳列館の新装オープンもつついよいよ愈けた作業になってしまった。「考古学陳列館案内」(昭和37年版)は予算が不足してしまって、理事会あてに、「予算前借り願い」を出して印刷費

看板の製作

にあてた。ようやく年度内には何とか出版することができた。展示の方は土器の復原などで手間どって、昭和38年の晩春にようやく完成し、河野浅子氏に依頼して入口看板の完成をみた。看板の彫刻料は無料にしてもらって、木板の材料費だけ30,000円をお支払いしただけだった。誠に申しわけのない金額だった。杉原先生には看板に「考古学陳列館」と揮毫してほしいとお願ひしたが、「明治大学」と揮毫されて「考古学陳列館」は明朝体で書かれて来た。新考古学博物館の入口にある表示レリーフの「明治大学」は杉原先生の筆になるものを作り直している。

運営委員会発足

改良した考古学陳列館はようやくその運営も軌道にのり、研究室の仕事とのかみ合いも順調となって、予算もいくらか増加することが、ようやく昭和39年度から実現することになったと思う。この折に考古学陳列館の館則や運営委員を決めて、何とか人並みな博物館運営をしようと試みることにした。運営委員には当時の諸課長をお願ひし、事務長として当時の図書館司書長の奥村藤嗣先生を指名して出発した。しかし、結局第1回目の運営委員会は、昭和30年6月25日(木)午後3時30分より考古学陳列館の整理室で開催することになった。むし暑い初夏の日で、古めかしい杉原家からプレゼントされた黒い扇風機が、轟音をたてて廻っていたことを憶い出す。因みにこの年の2月15日には杉原先生学位取得祝賀会が開かれた年でもある。

〔IV〕

考古学陳列館の 移転

昭和40年4月17日(土)の正午に、昼食をしながらの考古学陳列館運営委員会が開かれ、その席上で考古学陳列館の移転についての最初の話がなされた。噂として流れていた移転問題だったが、現実に耳にするのははじめてだった。しかしこの話は一度消えてしまって、我々職員の仕事の中では出て来なかった。この間移転先である小川町校舎をめぐる校友会とのいささかのトラブルが大学当局との間であったとの話も聞いている。そんな理由からか考古学陳列館の移転問題が再燃したのは夏休みあけの10月初旬だったと思う。しかし、どうゆうように小川町校舎の利用計画がなされ、各階の配分がどのようにしてなされたのかも不明確で我々職員には何も聞かされなかった。杉原先生ご自身で小川町校舎2階の平面図を作り、展示室・図書室・資料室・整理室・事務室の設計をされていた。いつも結果だけ知らされるということの繰り返しで、私自身はその計画についてほとんど手を出さずに、移転準備が進められていたというのが実情であった。

昭和40年12月に入ってから小川町校舎の内装工事が本格化して、考古学陳列館の細部にわたる計画をやっと知ることができた。あとは工事の終了をまって、引越をすればよいという手はずになっていた。引越の準備打合せが昭和41年1月26日に開かれて、当時の考古学陳列館囑託のほか大学院生をお願ひすることにした。堀部昭夫氏、佐藤攻氏に中心的なことをお願ひし、リヤカーなどを用いて大学の現業の方々と共に2月中旬までの間に、細々と作業を続けた。まがりなりにも公開できる見通しのついた時、館長名で各界にご挨拶とお知らせを発送した。

挨拶文は次の通りである。

移転の挨拶

あたたかなよい季節となりました。皆様お元氣でご活躍のことと存じます。さて十数年ものあいだ、ご利用いただいております考古学陳列館が、このたび本館4階から小川町校舎2階へ移転いたしました。

説明的展示

建物も装いをあらたにして、いままでの不備をおぎない、展示方法も、専門の学者はもちろんのこと、一般の人々にもわかりやすい説明的な展示方法を取り入れ考古学専門の博物館として再出発いたします。

ますます皆様に利用していただき、社会教育の面にもお役に立てば、私達にとっては望外のよろこびであります。

新考古学陳列館は来る4月1日に開館いたしますが、今後とも皆様のご指導を得て、さらに内容の充実をはかりたいと思います。

とりあえず、考古学陳列館移転のお知らせと新館のご案内を申しあげます。

昭和41年3月

明治大学考古学陳列館

館長 杉原 莊 介

考古学陳列館の再出発

この移転も予算面ではきわめて乏しいもので、小川町校舎内装関係だけの予算しかなかったようで、什器・備品まで手がまわらなかった。いつも仲良く仕事をして下さる業界の方々、たとえば伊豆印刷の鈴木さん、日米商会の内桶さん、小宮山書店さん、東京堂さんなどからご寄付をいただき、スチールの机や応接セットなどを備えた。ようやく事務室も体裁をととのえた。

入口の大看板は本館からそのまま移転したが、それをかけるつい立てなどのデザインについては、いつもの東京スタディオの風間さんをお願いして、製作も同時をお願いした。入口扉の飾り、部屋の仕切り表示などセンスの良い製作で、無細工な部分をカバーしてもらったことになった。

小川町校舎での考古学陳列館は壁面を多用した展示をおこない、世界的な資料の展示によって日本の先史時代を見直そうという目的を持っていた。展示についての私達の意見は十分に反映されているとあってよい。しかし、如何にもせまい感じで、各セクションを区切る壁体もやはり多少邪魔な感じもあった。「考古学陳列館案内」（昭和43年版）も旧版に若干の手を加えただけのものとなってしまった。しかし、相変わらず収蔵庫がないので、出来るだけ展示資料を増やして収蔵分を少なくする必要もあった。記念館に収めた資料の一部分は、以後人目に触れることもない資料となってしまった。

〔V〕

考古学陳列館の一時閉館

東京オリンピック以来、田中内閣の列島改造論が実践されて、日本全国が開発の渦に巻き込まれて、考古学的発掘調査は急増した。大学の自主的な目的をもつ調査が激減してしまい、いわゆる教育委員会考古学の出発となった。全国的な規模の大学紛争は考古学の持つ体質に再検討を促し、発掘調査の意味を再考させ、考古学とは、学問とは、という問いを鋭く発した。昭和44年、昭和45年にわたるこの闘争の間、考古学陳列館は大学当局の命によって一時閉館したりすることも

あって、一般公開の任を果たすことの出来ないこともあった。

小川町校舎陳列館移転ののち、大塚先生の在外研究、戸沢先生の学位取得と、それぞれ有意義な出来ごともあり、考古学陳列館の事業・運営にも熱が入って来た頃でもあったが、学生を中心とする発掘実習のあり方に対する矛盾なども提言されて、いろいろな面での再検討を要する時期を迎えていた。考古学研究室と陳列館との関係はどうあるべきか、大学院生は一人前の研究者なのか、どうなのかなど、教員と学生との関係までが再検討の材料ともなっていた。何回となく話し合いがなされ、次第に理解しあえるような方向に進んでいった。研究室教員と学生とのブリッジになる場所として考古学陳列館が位置づけられるようになるに当たって、考古学陳列館が、学生の教育の場としての性格が重視されるようになって来た。

学生の教育の場 としての考古学 陳列館

昭和40年度から私は文学部へも出講して考古学の講義をし、博物館実習を担当して来たが、後任者が決定しないうちに昭和46年4月に専任講師として文学部へ移籍することになった。

後任の安蒜政雄氏が正式に考古学陳列館学芸員として就任するまでの3年間（昭和46年～昭和49年）は、私が文学部と兼任という変則的な立場で館を運営して来た。その間、原田道雄、小野正敏、亀田駿一、小田野哲憲、鈴木次郎、高島徹の諸氏に嘱託をお願いして来た。しかし、その間、考古学陳列館として独自の事業を遂行することが出来なかった。上記の諸氏が、いまは社会のそれぞれ第一線で活躍してくれていることが、その間に果せなかった仕事にとってかわる、最もうれしいことである。

Fig. 22

学芸員の交代

